

## 第2回

# 「荻窪の記憶」

## こぼればなし

# サラリーマンの郊外生活

関東大震災後、荻窪に居を構えた住民の多くは都心に通う勤め人でした。田園の新鮮な空気を享受する一方、彼らには、毎朝、耐えねばならぬ苦痛がありました。



阿佐谷方面から見た大正13年の荻窪駅  
(松葉裏氏提供)

「毎朝何分かの間隔を限って来る電車の一筋が、唯一の頼りであるから、多数の居住者は、悉くその時間に停車場につめ寄せ。 (略) 車が駅へ来ると、吾れ勝ちに素より他を排して乗り込まうとする。出る、入る、押し分ける、かく除ける、全く修羅の巷である」

と、随筆『自分の郊外生活』に書いたのは作家で大学教授だった戸川秋骨です。与謝野鉄幹・晶子夫妻とともに現在の南荻窪に越してきたのは昭和2年のこと。その2年後には、「ラッシュアワー」という言葉が、大ヒットした映画『東京行進曲』の主題歌に、時代の風俗として登場します。

ちなみに、大正14年の時刻表によると、荻窪から東京駅までの所要時間は49分で、運転間隔は東京～中野間が6分、中野～吉祥寺間が10～30分。昭和5年になると、それぞれ4分と8分に短縮されました(東京までの直通は朝と晩だけで、あとは中野乗り換えでした)。

右の写真は、昭和4年刊行の『新版 大東京案内』(今和次郎編集)に載った、雨の日の東京駅前。「土くれ一つない舗道の上で泥靴を洗っているのは道の悪い郊外の住宅区域からの通勤者が多い証拠です」と説明がついています。長靴でなければ歩けない郊外のぬかるみ道と丸の内の舗道。そのコントラストに不均衡な日本の近代化を見ているわけですが、写真の通勤者のなかに荻窪の住人がいたとしても不思議ではありません。



(批評社版より転載)

(「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男)